

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025 年 7 月 7 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 大学院医学研究科 社会健康医学系専攻

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 小阪 杏名

助 成 の 種 類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	Society for Epidemiologic Research（北米疫学会学術集会）2025		
発 表 形 式	☐ 招 待 ・ ☐ 口 頭 ・ ☒ ポスター ・ ☐ その他（		
発 表 題 目	小児逆境体験と高齢期の社会的孤立発症リスクの関連：JAGES 2016-201縦断研究 (Adverse Childhood Experiences and social isolation in older adults : JAGES 2016-2019)		
開 催 場 所	米国マサチューセッツ州ボストン Sheraton Boston Hotel		
渡 航 期 間	2025年 6 月 7 日 ～ 2025年 6 月 18 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して 下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ☒ 無 ☐ 有（		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	350,000 円	
	使用した助成金額	350,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金額(円)
		航空運賃	266,900
		学会参加費	68,874
		ポスター印刷費	14,725
以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本ご支援がなければ、全額私費での渡航となったため、ご支援いただき大変助かりました。2点お 願いできるとすれば、学会終了後に郵送のみでの結果報告であったことに関して、渡航前に選考状況(採択は 望めないのか、最終選考に残っているのか、いつまでに結果が確定するかなど)だけでもご連絡いただければ ありがたかったです。また、渡航期間中の結果通達でしたので、メールでも採択の可否についてご連絡いただ ければ迅速な確認が可能だったと感じました		

成果の概要／小阪杏名

私は、2024 年 6 月に米国マサチューセッツ州ボストンで開催された Society for Epidemiologic Research (SER) (北米疫学会) に参加し、“Adverse Childhood Experiences and social isolation in older adults : JAGES 2016-2019” (小児逆境体験と高齢期の社会的孤立発症リスクの関連 : JAGES 2016-201 縦断研究) の題目でポスター発表を行った。本研究は、小児逆境体験 (18 歳以前に経験したトラウマとなりうる経験) と高齢期の社会的孤立の関連を、日本の高齢者を対象とした自記式調査に基づく縦断データを用いて明らかにしたものである。その結果、小児逆境体験を 4 つ以上経験した人はそうでない人と比較し、約 1.56 倍社会的孤立になりやすいこと、男性よりも女性で関連が強いこと、小児逆境体験の 8 個の項目のうち身体的虐待で特にその関連が強いことを明らかにした。

国際学会で本研究結果を発表する意義として、小児逆境体験は国や地域によらず同程度の子どもが経験しているとされ (Karen Hughes et al., 2017)、世界中で研究が行われているもののエビデンスが十分に蓄積されていないことが挙げられる。長寿先進国である日本の知見を国際学会で発表することで、研究の発展が期待できると考えた。さらに、論文原稿を執筆にあたって、小児逆境体験のうち心理的虐待よりも身体的虐待でその関連が強く認められた点が先行研究とは異なる結果となったため、解釈や考察の方向性について各国の研究者と議論することも目的とした。

本渡航計画では、自身の研究発表を通じて 5 名以上の海外研究者と意見交換すること、5 人以上の研究者の発表を聴講して議論すること、2 つの疫学手法に関するワークショップに参加することを目標とした。

研究発表当日は、1 時間のポスターセッション内で 8 人の海外研究者との意見交換を行った。目的の一つである「心理的虐待よりも身体的虐待で関連が強く見られた点」については、ACEs の定義・測定方法の相違、虐待の連鎖によるもの、想起しやすさによるもの、身体的虐待による精神障害媒介の可能性、などの視点から活発に議論を行った。アフリカの研究者からは、「身体的虐待が文化的な背景から虐待とは捉えられないケースもある」年的があり、文化背景による認識の違いも重要な要素であることを再認識した。また、multidimensional disadvantage を研究するオーストラリアの大学院生からは、オーストラリアでは、妊娠期以降の個人データが保険や医療データと統合され、健康の社会的決定要因を含めた分析が可能である事例を伺い、研究基盤の 2 カ国間の違いを学んだ。

ワークショップでは、今後の研究で使用する Difference-in-Differences and Synthetic Control Methods や G-computation, inverse probability weighting (IPW), and targeted minimum loss-based estimation (TMLE) について、第一線の研究者から実践的な講義を受けた。英語で高度な分析手法を習得することには不安もあったが、いずれの講師も参加者の理解に合わせて丁寧に教えてくださり、分析手法について理解を深めることができた。

今回の渡航では、国際学会への参加以外にも、2つ有意義な経験をすることができた。

1つ目は、ハーバード大学公衆衛生大学院の訪問である。博士課程学生の案内のもと構内を見学し、近年の政治的影響による研究職ポストへの影響やキャリアパスの選択肢について意見交換を行なった。

2つ目は、ニューヨークでの Food Help の取り組み視察である。コロンビア大学経済学部博士課程学生と打ち合わせの際、ニューヨークでは Food Help という主に貧困者を対象とした食事支援活動が多く行われている現状を教えていただき、南部地域で長年活動続ける団体を訪問した。

団体の特徴は大きく二つあった。一つ目は、大学教員の問題意識から設立された経緯をもち、研究や教育への協力姿勢が非常に強いこと、二つ目の特徴は、単なる食事提供にとどまらず、利用者やボランティアとの交流を通じて社会的孤立を軽減し、相談ブースを通じた適切な社会支援への接続を行っていることである。レストラン形式のバランスの取れた食事提供を行い、食事を楽しみながら会話し孤立の解消を図る点が印象的だった。代表者との意見交換では、日本における子ども食堂の多機能的な役割についても紹介し、関心を示していただいた。一方で、米国では子ども支援は主に学校内で行われ、地域ボランティアによる活動は限られている点も確認でき、今後日本の子ども食堂の国際展開の意義を再認識する機会となった。

今回、国際学会への参加及び現地視察を通じて、研究手法と現場の課題の双方を学び、日本では得難い知見とネットワークを得ることができた。研究者との議論を通じて、現在の研究成果を国際水準の学術論文として完成させることへの自信と方向性を得たと共に、新たな研究テーマの着想にもつながった。

今後も国際学会での発表や、現地視察を通じて、研究者としてのプレゼンス向上を図ると共に、この機会を得たネットワークを活かして、海外研究者との連携を深めていきたい。

最後に、本渡航の機会を支援いただいた関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。